

日韓合同授業研究会会報

第80号

2012年4月日発行

だから教科書は大事なのよ！

吉川

3月4日のモイムでE先生の「古代日本と朝鮮の関係をどうとらえるか……育鵬社版中学歴史教科書の古代日朝関係史像」の発表を聞きながら、改めて「教科書は大事なのだ」という思いが湧き上がってきました。

育鵬社の歴史教科書は横浜市のいくつかの学校で今年の4月から新たに使用されるということですが（現在、育鵬社の歴史教科書の採択率は3.8%）、E先生はまず、育鵬社の歴史教科書が2006年にねじ曲げられた教育基本法に最もかなった教科書であることを指摘しながら、教科書採択の拡大を憂慮しています。更に教科書に記述された内容が明らかに誤りである、あるいは伏せられ、あるいは過剰に美化され、その後の日本のたどった道を正当化する方向へ巧みに誘導するねらいがうかがえる、いわば歪曲された教科書であることを、古代史の部分を用いながら、丁寧に論証されました。特にこの教科書の中に、渡来人の果たした大きな役割が伏せられていることを力説しています。

私は自分の高校時代を思い出しました。1966年ごろ、日本史は3年で学習し、必修でした。日本史は好きな科目でしたから大学入試にも日本史を選択しました。教科書は絶対だと信じて疑わない、田舎の優等生(?)は、教科書に書かれているとおりに理解しました。そのころ使っていた教科書が、育鵬社の教科書ほどの露骨な表現ではなかったにしろ、おおよその筋書きとしては同様の描かれ方だったように思います。かくしてあたかも天皇家は天から降りてきて日本の国をまとめあげ続けた万世一系の王、日本民族は外来の文化を巧みに取り入れながら、独自に日本文化を切り開いて来たというイメージは無意識の内に私の中に定着していったと思います。

しかし、国語教員生活を続けていくうちに、様々な部分の矛盾やくいちがいに気づき、教科書に描かれなかった部分にこそ歴史の真実が潜んでいたことに愕然となりました。わが国の祖先が独自に開発したと思っていた漢文訓読法が、実は渡来人が大きく関わっていたと知ったときは本当に動揺してしまいました。

先にE先生が指摘なさった視点、「稲作が伝わったとあるが、伝わ

目次

だから教科書は大事なの	1
育鵬社版中学歴史教科書がえがく 古代史の日本と朝鮮	2
高校授業料無償化・朝鮮高校を放置して2年	14
第18回 奈良・飛鳥交流会 実施要綱 (第1次案)	15

ったのではなくそれを伝えた人がいたからだ、それは誰か？」という視点を持ちうることでできる中学生、高校生がどれほどいるのでしょうか？教科書には間違っただけは書かれていないと信じ、進学に追い立てられている子供たちにとって、重要なことは教科書が強調する事項の理解と暗記にほかなりません。そこに教科書に書かれていない行間を読み、複雑な世界情勢やひとつにくりきれない時代背景を考える余裕などはありません。

更に問題なのは教師自身の視点と理解です。教師自身も教科書を通して学び、授業を組み立てています。教師が授業では触れない周辺の背景や重要な知識を持っていないなければならないのは当然ですが、多忙な今の教師たちにとって歴史のすべてに精通し、正しい視点を持つことは難しい。そういう教師が教科書にそって教えるのは自然の流れであり、また、遠藤先生の指摘する美しい修飾語は教師が授業で効果的に使いたい言葉でもあります。「教師の教え方で教科書の内容をどのようにでも教えられる」という主張もありますが、これは事を荒立てず、対立を避ける責任放棄に他なりません。

だから私は言いたい。「教科書は大事なんだ。教科書は生徒のみならず、先生をも支配するのだから。」と。

育鵬社版中学歴史教科書¹がえがく古代の日本と朝鮮

…飛鳥文化を中心に

遠藤

はじめに

本稿では、育鵬社版中学歴史教科書の古代日朝関係史記述²、特に7世紀、飛鳥に都があった時期に関する記述を中心に検討する。

戦前の日本における古代朝鮮観とは、古事記、日本書紀の神話にかかれたとおり「日本が支配していた地」であり、「日本が上、朝鮮が下」の関係であった。³これらは「国史」教科書に記述されていたばかりではなく、戦前の歴史学もこのことを「検証」する方向で研究がおこなわれていた。

戦後、日本の教科書における古代日朝関係史記述は、戦前の歴史像を十分に克服することがで

¹育鵬社版は2012年4月から横浜市立中学校、神奈川県藤沢市立中学校、神奈川県立平塚中等教育学校等で使用される。ここでは市販本(『こんな教科書で学びたい 新しい日本の歴史』、2011、5)をもとに検討していく。

²ここであつかう時代以外についても、不正確、不適切な記述が多いが、それらは本稿であつかわない。

³これは、植民地支配を合理化、当然視する上で都合のよい解釈であった。加藤陽子はこのことに関連し「幕末からの流れでいえば、まず、朝鮮に対する認識が、王政復古と密接な関連をもって語られていたことを理解する必要があります。ペリー来航後の吉田松陰の朝鮮論や、1868(明治元)年12月14日の木戸孝允日記にみられる征韓論などは、その代表的なものです。松陰は、列強との交易で失った損害を朝鮮や満洲で償うべきであると論じつつ、国体の優秀性を皇統の永続性に見出し、天皇親政がおこなわれていた古代における三韓朝貢という理想のイメージに基づいて、朝鮮服属を日本本来のあるべき姿として描き出しました」と記している(『戦争の日本近現代史』講談社現代新書、2002、43頁、波下線は遠藤)。幕末以来、尊王攘夷論者やそれを継承した明治政府が、「天皇親政」と「三韓朝貢」、「朝鮮服属」を不可分のものとしてとらえていたことをあらためて確認しておく。

きぬまま、「任那日本府」記述に典型的にみられるように、多分に戦前の皇国史観に影響されてきた。この種のみかたは、育鵬社版教科書にかぎらず、いまなおさまざまなかたちでひきずっている。

図1 『こんな教科書で学びたい 新しい日本の歴史』 6頁

歴史の旅を始めよう

これから皆さんは、歴史の旅を始めます。

この旅の途中で、いろいろな歴史の風景に出会うことでしょう。その際に、注目してほしいことがあります。

まず、私たちが何気なく使っている日本語にも長い歴史があるという点です。日本は、中国大陸から漢字を取り入れましたが、日本語を表記するものとして活用しました。そして、その漢字をもとにわが国独自のかな(ひらがな、カタカナ)をつくりあげ、日本語の表現を豊かにしました。

これは一例ですが、私たちの日本には、海外からさまざまな文化を取り入れながらも、それを独自のものにつくりあげてきた長い伝統があることに注目してください。

次に、この旅では、さまざまな文化遺産と出合えるでしょう。穏やかな仏像や力強い仏像、華やかな絵巻や動きが伝わるような絵画、そして美しい庭園や建築物……。

このようなみごとな文化を築くことができたのはなぜでしょうか。そうした視点で日本列島にある各時代の「文化の宝庫」を見ていけば、歴史の旅は数倍も楽しくなるでしょう。

ところで、私たちの国の歴史には、平和な日々も激動の時代もありました。豊かな文化が花開いた季節も、戦争や内乱で国土が荒れた時期もありました。

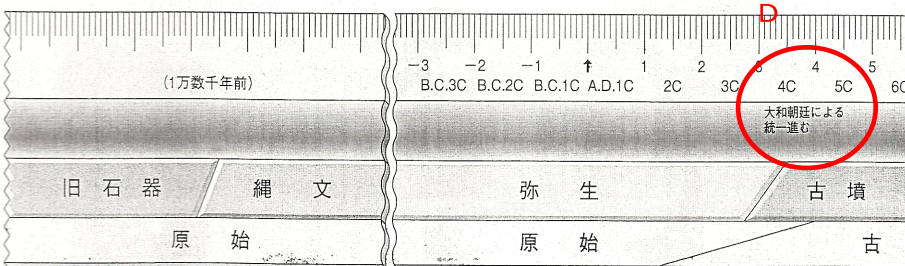
何百年、何千年という長い時間の中で、私たちの先人が積み重ねてきた分厚い地層のような歴史には、さまざまな「成功や失敗の教訓」がぎっしりとつまっています。

この「経験の宝庫」を学んでいくと、歴史の登場人物の中に、数多くの尊敬できる人を見いだすことができるでしょう。皆さんがこれからの人生で、困難に直面し判断に迷ったとき、それらの人物の行動から、大きなヒントを得ることができればと思っています。

そして、歴史の旅を進めていくと、私たちが住んでいる日本という国は、古代に形づくられ、今日まで一貫して継続していることに気づくと思います。その理由は何なのかを考えてみてください。

いよいよ歴史の旅が始まります。先人が築いてきた歴史のバトンを受けつぎ、これからの歴史をつくっていく、たくましいランナーになるための、旅の始まりです。

② 日本の歴史モノサシ



しかし、これらへの反省から、旗田巍『日本人の朝鮮観』（勁草書房、1969）があらわされ、朝鮮史研究会を中心に、日本における朝鮮史、日朝関係史研究のゆがみをただす方向で研究がすすめられてきた。これらの日本での研究におおきな刺激と影響をおよぼしたのが、金錫亨「三韓三国の日本列島内分国について」（翻訳は『古代日本と朝鮮の基本問題』（学生社、1974）所収）や鄭寅普をはじめとした研究等、そして1972年の高松塚古墳壁画等の発見であった。井上秀雄ほか『セミナー日本と朝鮮の歴史』（東出版、1972）、朝鮮史研究会『朝鮮の歴史 新版』（三省堂、1995）、2005年8月朝鮮史研究会幹事会教科書検討小委員会「中学校教科書（全8社）の朝鮮関係記述についての検討」⁴等はこれらの研究進展をうけとめ、歪曲された古代史像をただし、歴史教育に反映させようとした成果である。

1 歴史観…「歴史の旅を始めよう」「歴史の旅の終わりに」について

まず図1にしめした文(6頁)をみながら検討したい。

第1に、この文のキーワードは「伝統」であり、それをAの「穏やかな」、「力強い」、「華やかな」、「美しい」、「みごとな」といった、賛美する形容詞で修飾している。それらの歴史がCにみられるように古代以来、一貫して継続しているとむすんでいる。「その理由は何なのか」に対する回答をかながえたとき、「万世一系の天皇」、「天皇を中心とした悠久な日本文化」を連想しがちである。著者は、この記述は質問をなげかけたただけであり、生徒の回答は多様である、とでもいうかもしれない。しかし、それはたぐみな責任回避であろう。

第2に、Bのように「数多くの尊敬できる人」を中心に歴史を描こうとしていることも、育鵬社版の特徴である。人物中心史観である。

第3に、記述全般をみればわかるように、日本中心史観、それも過去を賛美しようという姿勢で終始していることがわかる。

つぎに「歴史の旅の終わりに」(253頁)をみてみよう。

まず日本に老舗が多いことをあげ、その理由として「他の国に比べて老舗が多いのは、日本では人々が安心して暮らすことのできる、穏やかで安定した歴史があったEことの反映といえるでしょう。日本では異なる民族が入り乱れての動乱は起こりませんでした。F 外国の植民地になったこともありません。国のあり方が今日まで変わることなく続いていますG」

とし、さらに「日本は、他国からの大きな人口の流入もありませんでした。H縄文時代の人々も、奈良時代や平安時代の人々も、私たちと血のつながるご先祖様Iということが出来ます。日本の歴史は、私たちのご先祖様Jの歩みなのです」ともしている。

Fのように異なる民族同士の内乱があった日本以外の国のあり方はふさわしくないのだろうか。壬申の乱や南北朝の内乱、戦国時代、西南戦争のような内乱はふさわしいといたいのだろうか。

Gの記述から、外国の植民地になった国は否定的にみななければならないのであろうか。さらに、この表現からみるかぎり、近代日本が台湾や朝鮮を植民地とし、中国東北を植民地同然に支配したことをどのようにとらえればよいのであろうか。その歴史的事実を肯定的にとらえよ、といたいのであろうか。「国のあり方が今日まで変わることなく」と記すが、これは天皇制をさしているものであろうか。天皇制であるとしたら、二つの憲法におけるそのあり方は大きく変わった。植民地領有という点をみれば、植民地を手ばなしたというという点で大きく変わった。過去から現在に至る日本の歩みをただ賛美したいがためにこのような表現をしているとしか思えない。

Hは弥生文化の時期にまず大量の人々が朝鮮半島等から渡来し、その後も朝鮮半島から渡来人がやってきたが、それらについてはみないのであろうか。他国からの人口流入がすくない方が、

⁴ <http://wwwsoc.nii.ac.jp/chosenshi/> 2012. 2. 26 検索

よき「ご先祖様」(I、J)としてありがたく受け入れることができるという見方なのであろうか。

また「そうした多様な外国の文化を受け入れても、日本は、文化の独自性を変えることはありませんでした。(改行) 例えば仏教では、伝来したばかりのころ、その導入をめぐる対立がございましたが、聖徳太子はこれを積極的に取り入れました」としるしている。

このようにしるしつつも、聖徳太子の周囲にいた渡来人僧侶のことなどまったく言及していない。

これらから、およそ歴史的観点ではなく、「ご先祖様」等をはじめ、情緒にみちた自己陶醉表現で英雄物語的に、しかも「朝鮮隠し」の視点で歴史をえがきなおし、中学生に訴えているということができる。

2 大和政権と朝鮮の関係をどうみるか

…「大和朝廷と東アジア」について

「大和朝廷と東アジア」は「中国と朝鮮」、「帰化人の伝えたもの」の小見出しにわかる。

まず30頁から31頁の記述をもとにみていきたい。

4世紀末、朝鮮半島では分立していた小国の統一が進み、北部には高句麗①、南部には新羅と百済があり、勢力を争っていました。また、その南には任那(加羅・伽耶)②とよばれた地域があり、複数の小国が存在していました。一方、当時の中国は南北朝時代で、南北に国々が分かれて争っていたため、朝鮮半島への影響力は弱まっていました。

朝鮮半島北部にあった高句麗は、中国側に領土を広げる③とともに、南部の新羅や百済へも軍を進めました。鉄の資源を求めて半島南部と交流のあったわが国は、百済からの求めもあり、朝鮮に出兵しました。5世紀初めに建てられた高句麗の広開土王(好太王)碑には、わが国と高句麗のあいだに戦いがあったことを示す碑文が刻まれています。④こうした情勢のなかで、わが国は任那⑤に対して影響力をもつようになりました。

5世紀ごろ、大和朝廷の勢力は九州から東北地方南部にまでおよんでいました。中国の南朝の歴史書には、倭の5人の王(倭の五王)が、何度も皇帝のもとへ使者を送ってきたと記されています。⑥大和朝廷が、南朝に朝貢していたのは、高句麗に対抗し、朝鮮での自らの影響力を確保するためでした。⑦(下線部は筆者)

6世紀になり、新羅が勢力をのぼすようになると、友好関係にあった百済から、わが国に助けを求める使者がたびたびやってきました。新羅は任那⑧にも進出し、6世紀半ばにはその地域を支配したため、朝鮮半島でのわが国の影響力は後退しました。

上記記述にある「大和朝廷」は、史料には「倭」としるされているものである。「倭」を「大和朝廷」と同一とみるのはただしい記述とはいえない。東京書籍版⁵では「大和政権は、百済や小国が分立していた加羅(任那)地方の国々と結んで、高句麗や新羅と戦いました」としるしつつも、注において「高句麗の好太王(広開土王)の功績をたたえる石碑には、好太王が、しばしば倭の軍をやぶったことが記されています」と、「大和政権」すなわち「倭」とみることには慎重に記述している。あらかじめあるべき歴史像をえがいて、それに「倭」をあてはめるのではなく、より慎重に見て、教科書に記載すべきであろう。戦後、朝鮮史研究会等を中心にすすめられてきた研究

⁵ 『新編新しい社会 歴史』(東京書籍、2011)26頁

は、かつての「任那日本府」像とはことなるものである。⁶

上記記述をみていくと、百済から援軍を求められたので出兵した、その結果、「大和朝廷」が「任那」に影響力をもつようになった、となっている。「任那日本府」とまでは記していないものの、「影響」という表現をつかいつつ「支配」を連想させるものとなっている。高校進学校でよくつかわれている『詳説日本史B』（山川出版社、2011）⁷で、『日本書紀』では加耶諸国を「任那」とよんでいる」と記述しているのと比較しても、育鵬社版の記述は特異である。

つぎに下線部①から⑦についてみていく。

①③で高句麗は朝鮮半島北部にあったと位置づけているが、高句麗発祥地はもともと中国東北であり、その後、鴨緑江をこえ朝鮮半島北部へと拡大していったのであり、「中国側に領土を広げる」というこの記述は正確ではない。なぜ、現在の国境から歴史をとらえようとするのであろうか。

②⑤で「任那」という用語を使っていることも、正確ではない。「わが国」、「大和朝廷」による「影響」ということを強調するためにもちいているとしかいえない。

④で「わが国」と高句麗がたたかった旨、しるしていることも正確ではない。たたかったのは「わが国」ではなく、「倭」である。「倭」ではなく「わが国」という語を挿入することによって、「わが国」すなわち「日本」という錯覚を誘導するかのような記述である。

育鵬社版は倭王武の上表文と広開土王碑および「拓本」⁸の写真を載せ、30頁から31頁の記述の根拠としている。「拓本」の写真を載せることは、一見公正に見えるが、ここに掲載した「拓本」はあまりにも鮮明であって、不自然としかいいようがない。そもそも、1970年代初以来、広開土王碑文研究は活発化してきたが、拓本の写真を掲載するならば、それらの研究をふまえ、いつ、誰による拓本かを示すのが誠実な教科書作成態度であるといえる。このような鮮明なもの載せることは、中学生に大きな誤解を与えることになるであろう。さらに、各教科書は、育鵬社版と同様、辛卯年(391年)記事にのみ注目し、これを「倭」、「大和政権」の朝鮮進出⁹の一級史料とし

⁶ 朝鮮史研究会『朝鮮の歴史 新版』（三省堂、1994）は「日本では、「任那」諸国とよぶこともあるが、「任那」とはほんらい、加耶の一国(金官国)の別のよびかたにすぎない」としている。また、2005年8月朝鮮史研究会幹事会教科書検討小委員会「中学校教科書(全8社)の朝鮮関係記述についての検討」においても、「この時期に古代日本が朝鮮半島南部に侵出して支配したという『任那日本府』説は、すでに学術的には否定されている。にもかかわらず、大和朝廷が支配したと明記はしないまでも、あいまいな表現ではあるが支配力を及ぼしていたかのような表現が目立つ」と指摘している。

⁷ 22頁

⁸ 育鵬社版に載っているものは、「墨水廓填本」(酒匂景信本)とおもわれる。したがって「拓本」としす。筆者は1985年、実見により、長年にわたる風雪により、磨滅損傷がはなはだしいことを確認した。なお、広開土王と拓本については、武田幸男『広開土王碑との対話』(白帝社、2007)等がくわしい。

⁹ この日本でのみかたに対し、鄭寅普はつとに「百残・新羅は、太王にとってはともに属民である。そして倭はかつて高句麗に來侵し、高句麗もまた海を渡って(倭に)往侵し、たがいに攻撃し合った。そして百残が倭と通じたので、新羅は不利な情勢になった。太王は、百残も新羅も自分の臣民であるのに、どうしてこのようなことをするのかと思った。かくして太王は、みずから水軍を率いて出陣した」(「広開土境平安好太王陵碑文釈略」『古代日本と朝鮮の基本問題』(学生社、1974)所収)と解釈していた。

倭を具体的にどのように解釈するのかといったことをはじめ、「進出」、や「支配」の実態は何か等、未解明な点がおおい。いずれにせよ、近代の朝鮮侵略、アジア侵略とかさねあわせる

てみる傾向が強いが、他の部分の記事をも含めて検討したうえで記載しないと一面的、一方的な記述になりかねない。この碑は、あくまでも広開土王の事績をたたえる観点でたてられたということをも前提としてみておきたい。¹⁰

つぎに「倭の五王」についてみておこう。⑥のように、「大和朝廷」の勢力が広大になり、その結果として「中国の南朝の歴史書には、倭の5人の王(倭の五王)が、何度も皇帝のもとへ使者を送ってきた」とし、中国の歴史書は、「大和朝廷」の支配が広がっていったことの証明であるかのように記している。この点に関しては、東京書籍版¹¹や山川出版社版¹²と比べ、大差はない。

これらの記述からは、高句麗、百濟、新羅の国王たちもそれぞれ宋に上表文を送り、倭王とともに東アジアにおける「將軍号」争いをしていたことがみえてこない。そればかりではなく、倭王武に代表される倭の五王の上表文だけをみていると、倭王のみが強大な「將軍号」を称していたかのような錯覚にさえおちいる。¹³この点については、育鵬社版のみならず、他社教科書の記述も再検討しなければならない。

⑦の記述について、「大和朝廷の中国南朝への朝貢を、朝鮮南部とのつながりを維持するためとするのは、意味するところが不明確」¹⁴ということができる。

最後に「帰化人の伝えたもの」について検討する。

さまざまな技術、漢字や儒教が伝来したことを載せているが、他社教科書と異なり、括弧づきで「渡来人」という語をいれているとはいえ、「帰化人(渡来人)」という用語を使用しているのが特異である。「帰化人という言葉には、天皇の徳を慕ってきたものとする意味が含まれているため、この時代の渡来者を表す用語としては不適当であるし、そのため今日では使用されない語である。教科書で使用するのに適当な用語ではない」¹⁵という指摘のとおりである。

「帰化人」という語をあえて使用するのには、育鵬社版なりの理由があるようである。つづく部分で「6世紀前半にはわが国に支援を求める百濟の王から仏像や経典が献上され、仏教が伝来しました(下線は遠藤)と、「献上」という語をもちいているからである。そもそも「献上」とは「下のものが上のものにさしあげる」という意味である。この記述では、「大和朝廷」が百濟の上

ようなみかたは排さなければならない。

¹⁰ 『日韓歴史共通教材 日韓交流の歴史』34頁では、「広開土王が倭と百濟、加耶の勢力と争い、勝利を重ねた事実が記されている。しかし、その後150余年が経過した570年頃になると高句麗は倭と友好的な関係を求めるようになった」と記述し、育鵬社版をはじめとした各歴史教科書のような記述をしていない。参考にすべきであろう。

¹¹ 26頁、27頁。「大王は、倭の王としての地位と、朝鮮半島南部を軍事的に指揮する権利とを中国の皇帝から認めてもらうために、中国の南朝に、たびたび使いを送りました(倭の五王)。」

¹² 23頁。「さらに、朝鮮半島南部をめぐる外交・軍事上の立場を有利にするため、5世紀初めから約1世紀のあいだ、『宋書』倭国伝に讚・珍・濟・興・武とするされた倭の五王があいついで中国の南朝に朝貢している。」

¹³ この点に関して坂元義種「8使持節・都督諸軍事」、「9倭国王武と開府儀同三司」(井上秀雄ほか『セミナー日本と朝鮮の歴史』東出版、1972、32～35頁)がわかりやすい。ちなみに高句麗は、倭とはちがって、中国の南北両朝と外交関係をむすび、独自の位置をしめていた。『朝鮮の歴史 新版』52頁、歴史教科書研究会(韓国)・歴史教育研究会(日本)共編『日韓歴史共通教材 日韓交流の歴史』(明石書店、2007)33頁等参照。

¹⁴ 2005年8月朝鮮史研究会幹事会教科書検討小委員会「中学校教科書(全8社)の朝鮮関係記述についての検討」参照。

¹⁵ 同上参照。

にたち、百済を支配していると位置づけていることになる。

3 聖徳太子¹⁶と飛鳥文化について

ここでは36～37頁の小見出し「聖徳太子の登場」(図3)、「聖徳太子の外交」(図4)、「隋の滅亡と唐の繁栄」(図4)、40頁の「飛鳥文化」(図5)について検討する。

冒頭、「大陸では589年、分裂していた中国を隋が統一しました。隋の出現は、東アジアの国々の大きな脅威となり、朝鮮半島の百済、新羅は隋に朝貢しました」という記述ではじまる。その後、聖徳太子が登場し、冠位十二階、十七条の憲法を制定し、外交面では隋に使節を派遣し、「わが国が隋と対等な国であることを強調しました」とつづいている。

このように記述することによって、「隋に朝貢した百済、新羅」とはことなり、「対等な国であることを強調したわが国」をうかびあがらせ、その貢献者こそ「気概」をふるった聖徳太子であったといたいようである。

36～37頁、40頁では、「十七条の憲法」17条すべてを紹介したり、コラム「天皇と皇帝—聖徳太子の気概」で外交における聖徳太子の功績をたたえる記述分量がおおく、めだつ。他社教科書と比較したとき、特異である。

その一方で、蘇我氏とともに政治を担当したことについての記述はない。わずかに、「皇族と蘇我氏双方の血を引く」のひとことのみであり、また37頁「聖徳太子系図」に「蘇我氏との関係も深い」と記しているのみである。むしろ「また、十七条の憲法をつくり、役人の心構えを説くとともに、天皇を敬いその命令に従うべきことを決めました。これらの改革には、蘇我氏の強大な力に歯止めをかけ、天皇が国の中心であることをはっきりさせるという目的もありました」と、蘇我氏との対立軸上に聖徳太子を位置づけている。実際には聖徳太子は、蘇我馬子¹⁷と協力しつつ政治を推進したのであり、育鵬社版記述はあやまっている。「蘇我氏=悪、聖徳太子=善」という図式、すなわち渡来人をおおく配下にかかえ、渡来人説¹⁸もある蘇我氏を「天皇に反逆した悪者」としたいようである。

さらに朝鮮半島との関係がふかかったことについては、「中国や朝鮮から伝わった、新しい文化を積極的に取り入れながら、日本人の美意識に合った建築や美術品がつくられました」という記述がある程度である。また、「鞍作鳥(止利仏師)」の名前はのせるものの、渡来人であることに言及していない。東京書籍版には「女帝の推古天皇が即位すると、おいの聖徳太子が摂政になり、蘇我馬子と協力しながら、中国や朝鮮に学んで、天皇を中心とする政治制度を整えようとしてました」¹⁹、「聖徳太子や蘇我氏は、仏教を広めようとしたので、都のあった飛鳥地方(奈良盆地南部)を中心に、仏教をもとにした文化が栄えました。これを飛鳥文化といい、法隆寺の建築や、そのなかにある釈迦三尊像などの仏像がその代表です。それらは、おもに朝鮮半島からの渡来人の子孫によってつくられましたが、南北朝時代の中国や、さらに遠くインドや西アジアなどの文化の

¹⁶ 育鵬社版では「聖徳太子(厩戸皇子)」と、東京書籍版では「聖徳太子」と記している。「聖徳太子」というよび名は、8世紀初以降、「聖徳太子信仰」がひろまるなかで、遺徳をたたえるためにつけられたものである。「厩戸王子」が正確である。吉村武彦『聖徳太子』(岩波新書、2002)、田村圓澄『聖徳太子』(中公新書、1964)参照。筆者は「厩戸王子」が正しいと考えるが、本稿では記述の進行上「聖徳太子」を用いる。

¹⁷ 波多野淑子先生は、系図をみつつ「聖徳太子の母はだれの孫にあたるか、聖徳太子の妻はだれの子か」と、授業の場で導入としてあつかったという。聖徳太子と蘇我氏の間を注目させるときに有効な方法である。

¹⁸ 門脇禎二『蘇我蝦夷・入鹿』(吉川弘文館、1977)

¹⁹ 東京書籍版32頁

影響も受けています²⁰とし、さらに新羅の弥勒菩薩像と広隆寺の弥勒菩薩像の写真ものをせる²¹等、日本と朝鮮半島が文化的に関連がふかかったことを紹介しているのとは対照的である。

4 おわりに

8～11 頁に「課題学習 身近な祭りを調べてみよう」というコーナーがある。その中に「2人が調べた三社祭」として「三社祭の歴史」というかこみがある。

そこでは「七世紀の飛鳥時代のこと。漁師の兄弟の網に仏像がかかった。兄弟が仏像を長者に見せたところ、長者は聖観世音菩薩像であることに驚き、寺を建てて手厚くまつた。それが浅草寺である。そして、この三人をまつたのが三社権現社、今の浅草神社である(このため三社祭とよばれる)。ということで、浅草寺と浅草神社は一体といってもよい関係にあった」としている。図や写真入りで生徒自身による調べ学習という体裁をとっているが、三社祭という身近な話題をせっかく提示しながら、渡来人との関係は一切のせていない。

本研究会のYは日韓合同授業研究会会報『ウリ』79号で、浅草寺、浅草神社の「朝鮮隠し」について指摘しているが、育鵬社版記述もこの点同様である。

「朝鮮隠し」は、浅草寺のみならず、他の部分や聖徳太子、飛鳥文化の記述にみごとにあらわれている。「朝鮮隠し」、「渡来人隠し」が育鵬社版のおおきな特徴のひとつであろう。

聖徳太子の仏教の師が高句麗僧慧慈であること、慧慈の強い影響の下、飛鳥寺が百済の技術者たちの協力をえてたてられた寺院であったこと等を考えると、育鵬社版のように「朝鮮隠し」をするのではなく、生徒に飛鳥文化と渡来人の関係、朝鮮半島との関係を提示していくことは、当時の人間交流、文化交流をかんがえさせる絶好の教材になる。

古代日朝関係史を「対立」、「支配」の構図ではなく、相互交流の様相を中心にみていけば、金泰植²²がいうように「これまでのような歴史認識の対立を乗り越えて、より親密な関係を結ぶことができるだろう」。2001年12月23日の天皇による「私自身としては、桓武天皇の生母が百済の武寧王の子孫であると続日本紀に記されていることに韓国とのゆかりを感じています」という発言²³をみるまでもなく、古代以来朝鮮半島との関係が密接であったことを教科書に記載することは決して不適切なことではない。

また、朝鮮植民地支配を正当化する論理は、古事記、日本書紀を中心にくみだてられた一方的に歪曲された日本の古代史像、特に対朝鮮像に発している。この歪曲された歴史像をただすべく、戦後、日本史研究、朝鮮史研究等がすすめられ、その成果が一定程度歴史教科書に反映されてきた。しかし、育鵬社版では歪曲された像をただすどころか、あえてかつての歪曲された古代史像をもちだしてきたということができる。

育鵬社版の歴史像からは韓国やアジアとの平和的な関係をむすぶことはできない。この不正確かつ不適切な表現にみちた教科書を子どもたちにわたすことになってしまったことを、わたしたちはきちんと反省しなければならない。

2012年度横浜市の中学校等が育鵬社版を採択したことにより、歴史教科書採択率は急上昇した。採択冊数は約4万8,000冊、採択率約3.8%にのぼった。これはあなどれない数値である。しか

²⁰ 東京書籍版 38 頁

²¹ 東京書籍版 39 頁

²² NHK「日本と朝鮮半島の2000年」プロジェクト『日本と朝鮮半島 2000年 上』(NHK出版、2010)43頁

²³ 天皇賛美を基調とする育鵬社版であるのに、この発言はなぜか掲載していない。

し、横浜市の中学校教員や生徒がこの教科書を使用すれば、かならずや問題点に気づくはずである。東京都杉並区では2012年度、逆に不採択になったが、このようなごきこそつくりあげていかなければならない。

図2 育鵬社教科書採択地図

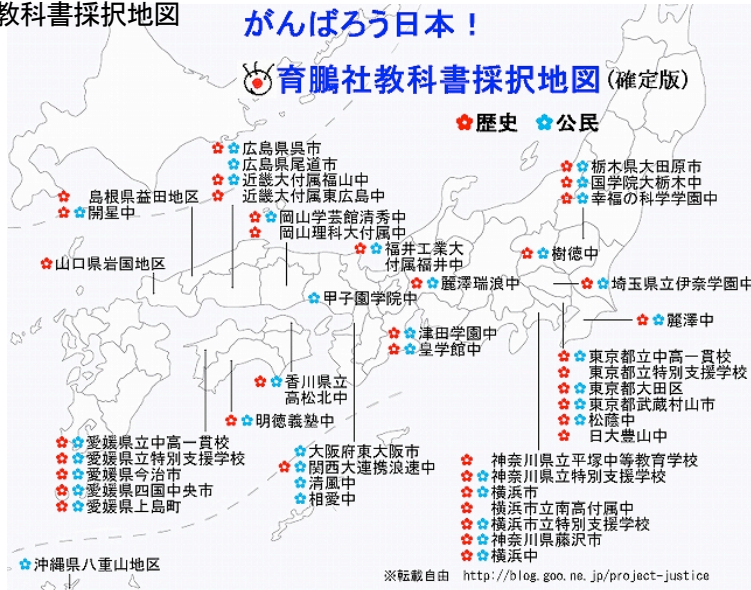


図3 『こんな教科書で学びたい 新しい日本の歴史』36頁

第2節 「日本」の国の成り立ち

どんなことが書いてあるかな。

17条の憲法(六〇四年)

(1) 和を貴び、人にさかとうことがないよう心がけよ。

(2) 仏教をあつく信仰しなさい。

(3) 天皇の命令には、必ずつしんでおきなさい。

(4) 役人は礼を重んじ、すべりの根本とせよ。

(5) 私利私欲を捨て、公平な裁判をしなさい。

(6) 悪をこらしめ、善をすすむなさい。

(7) 役人は職務を守り、権力を乱用してはならない。

(8) 役人は早く出勤し、遅く帰りなさい。

聖徳太子(574～622)
厩戸皇子とよばれた。上の絵は聖徳太子像と伝えられるもの。(宮内庁蔵)

大陸では589年、分裂していた中国を隋が統一しました。隋の出現は、東アジアの国々の大きな脅威となり、朝鮮半島の百濟、新羅は隋に朝貢しました。わが国では6世紀後半、大和朝廷の有力な豪族のあいだで争いがおこりました。仏教をめぐり、積極的に受け入れようとする蘇我氏と、これに反対する物部氏が対立し、蘇我氏が物部氏をほろぼしました。そうしたなかで、推古天皇がわが国で初の女性天皇として即位しました。この天皇を支える摂政となったのが、幼いころからすぐれた才能を示し、皇族と蘇我氏双方の血を引く聖徳太子(厩戸皇子)でした。

太子は、すぐれた人材を確保するために冠位十二階を制定し、家柄や身分よりも、個人の能力によって役人を取り立てました。また、十七条の憲法をつくり、役人の心構えを説くとともに、天皇を敬いその命令に従うべきことを定めました。これらの改革には、蘇我氏の強大な力に歯止めをかけ、天皇が国の中心であることをはっきりさせるという目的もありました。また、太子は熱心に仏教を研究するとともに、寺院の建立を進めました。

太子が示した「和」を重んじる考え方や、外来の仏教を保護しながら、のちの神道につながるわが国古来の信仰も尊ぶという姿勢は、その後のわが国の伝統に大きな影響をあたえました。

8 聖徳太子の国づくり

●聖徳太子がめざした政治とはどのようなものだったのだろうか。

このころ、それまでの天皇を天子(天皇)とよぶようになったと考えられる(→p.37コラム)。

天皇にかかわって政治を行う職。のちの時代には、天皇が幼少または病気のときに置かれるようになった。

36

天皇と皇帝——聖徳太子の気概

「皇帝」とは、秦の始皇帝以来、中国の歴代王朝の長を示す位でした。皇帝は全世界を支配する者とされ、周辺の国々の長は皇帝から「王」の名をあたえられました。国王は皇帝に服属し、貢ぎ物を差し出すことで、中国の強大な力や豊かな富、文化の恩恵を得てきたのです。わが国もかつては「倭王」の名をあたえられ、服属国の一つとなっていました。

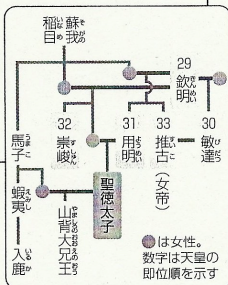
『隋書』には、607年、「日出づる処の天子、書を日没する処の天子に致す。恙無きや」(日が昇る国の天子から、日が沈む国の天子にあてて手紙を送ります。ご無事におすごしですか)という手紙が、聖徳太子から隋の皇帝・煬帝に送られたことが記されています。そこには、たとえ小国とはいえ、日本は独立国として中国と対等

だという意味がこめられていました。

また、『日本書紀』には、608年、推古天皇が隋の皇帝に送った手紙に、「東の天皇より、つつしんで西の皇帝に白す」(東の天皇より、つつしんで西の皇帝に申し上げます)とあり、「王」の称号にかわり、「天皇」の称号が使われたことが記されています。*

このようにわが国は、聖徳太子の時代にはすでに、中国の影響からぬけ出そうとする政治的な動きを示していたのです。

*このとき、天皇の称号が初めて使われたとされる。一方、天武天皇(在位673～686)の時代になってからだとする説もある。



④聖徳太子の系図 聖徳太子は用明天皇の皇子であり、推古天皇の甥に当たる。蘇我氏との関係も深い。

聖徳太子の外交

太子は小野妹子らを中国の隋に派遣しました(遣隋使)。それは、新しい国づくりのために、

中国の制度や文化を取り入れるためでした。

607年、太子は隋の皇帝あての手紙を妹子に託し、その中で、
5 わが国が隋と対等な国であることを強調しました。隋の皇帝はこれに激怒しましたが、当時、隋は高句麗と対立していたため、わが国と敵対するのは好ましくないと判断し、妹子らに使者を付き添わせて帰国させました。

遣隋使には、多くの留学生や留学僧が従いました。長期の滞在を終えて帰国した彼らの新知識は、のちの大化の改新に始まる新たな国づくりに、大きな役割を果たしました。
10

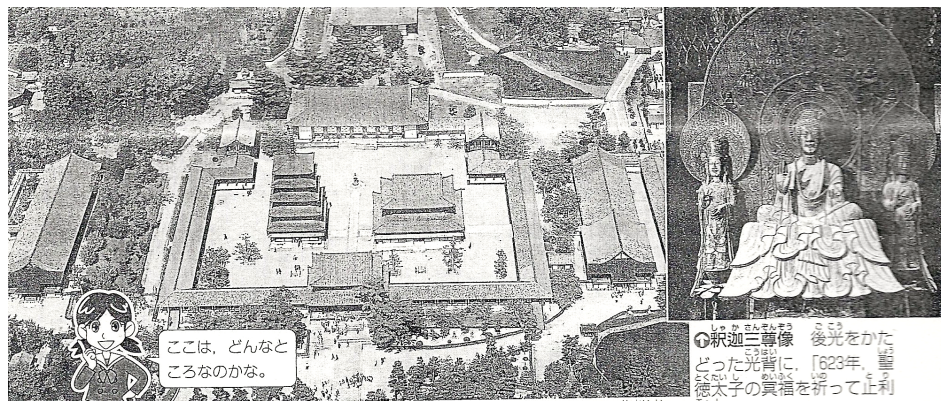
太子の活躍した時代、政治の中心は飛鳥地方(奈良県)にありました。この時代を飛鳥時代とよびます。

隋の滅亡と唐の繁栄

隋は外国遠征や大運河の建設などを行い、
15 人々に負担をかけたため、農民のあいだに反乱がおり、唐によってほろぼされました。唐は隋にならって律令とよばれる法律を整備し、大帝国を築きました。東西の交流が活発になり、都の長安は、人口100万人を超える国際的な都市としてにぎわいました。

冠色	位階名
紫	大徳 小徳
青	大仁 小仁
赤	大礼 小礼
黄	大信 小信
白	大義 小義
黒	大智 小智

⑤冠位十二階(603年) 役人の位を12段階に分け、冠の色で区別できるようにした。位階は一代限りで、世襲されなかった。



①法隆寺 現在の建築物は、670年以降に再建された。1993(平成5)年に世界遺産に登録された。(奈良県)

②釈迦三尊像 後光をかたどった光背に、「623年、聖徳太子の眞摺を祈って止利仏師につくらせた」とある。(鞍作鳥 作 奈良県 法隆寺蔵)

10

飛鳥文化・白鳳文化と遣唐使

◎飛鳥・白鳳文化はどのような特色をもっていたのだろうか。



③中宮寺弥勒菩薩像 片足をもう一方の足の上に乗せて台座に座り、右手を頬に当てて思いにふける姿を表している。(奈良県 中宮寺蔵)

飛鳥文化

聖徳太子や蘇我氏は、仏教を深く信仰し、広めようとしたため、7世紀前半の飛鳥時代には、仏教をもとにした文化が栄えました。これを飛鳥文化とよびます。中国や朝鮮から伝わった、新しい文化を積極的に取り入れながら、日本人の美意識に合った建築や美術品がつけられました。

蘇我氏は、最初の寺院である飛鳥寺を建て、聖徳太子は、法隆寺を建立しました。法隆寺は、現存する世界最古の木造建築で、調和の取れた優美な姿の五重塔や金堂が、中国では見られない独特な配置で建ち並んでいます。法隆寺には、鞍作鳥(止利仏師)による釈迦三尊像や、自然な立体感と柔和な表情が特徴の百済観音像などの仏像のほか、扉や台座にたくさんの絵画がえがかれた玉虫厨子などが残されています。中宮寺や広隆寺の弥勒菩薩像も、神秘的な微笑みをたたえた仏像として親しまれています。

白鳳文化

天武・持統天皇の時代には、律令国家の建設に向かう人々の意気込みを反映して、清新な文化が生まれました。この7世紀後半から8世紀初頭の文化を、白鳳文化とよびます。

朝廷の儀式が充実し、天照大神をまつる伊勢神宮が整えられ、

天皇陛下、W杯で交流に期待

2001.12.23

「韓国とのゆかり感じています」

天皇陛下は23日、68歳の誕生日を迎えた。これに先立って記者会見し、深刻化する経済情勢が国民生活へ与える影響を案じ、この一年を振り返った。日韓共催のサッカーワールドカップ（W杯）との関連で、人的、文化的な交流について語る中で「韓国とのゆかりを感じています」と述べた。「残念な歴史にも触れ、両国民の交流が良

い方向へ向かうよう願う気持ちを示した。（4面に発言要旨など）W杯の共同開催国、韓国に対する関心も思いを問われ、陛下は「回国が

「恒武天皇の生母、百済王の子孫と続日本紀に」

「きょう68歳、会見で語る」

「このことを私どもは球戦後の復興を例に、経済情勢など日本が抱える問題を「国民が必ずや乗り越えていくもの」と期待しています」と語った。皇太子（夫妻の赤ちゃん）については「健やかに育つてくことを願っています」と喜んだ。

図7 朝日新聞 2001年12月23日付

日本と韓国との人々の間には、古くから深い交流があったことは、日本書紀などに詳しく記されています。韓国から移住した人々や招へいされた人々によって様々な文化や技術が伝えられました。宮内庁楽部の楽師の中には、当時の移住者の子孫で、代々楽師を務め、いまも折々に雅楽を演奏している人があります。こうした文化や技術が日本人の熱意と韓国の人々の友好的態度によって日本にもたらされた

ことは幸いなことだったと思います。日本のその後の発展に大きく寄与したことを思っています。私自身としては、恒武天皇の生母が百済の武寧王の子孫であると続日本紀に記されていることに韓国とのゆかりを感じています。武寧王は日本との関係が深く、このとき日本に五経博士が代々日本に招へいされるようになりまし。また、武寧王の子、聖明王は、日本に仏教を伝えたことで知られております。

しかし、残念なことに、韓国との交流は、このような交流ばかりではありませんでした。このことを、私どもは忘れてはならないと思います。ワールドカップを控え、両国民の交流が盛んになってきていますが、それが良い方向に向かうためには、両国の人々がそれぞれの国が歩んできた道を個々の出来事において、正確に知ること、努め、個人個人として互いの立場を理解していくことが大切と考えます。

ワールドカップが両国民の協力により、滞りなく行われ、このことを通して両国民の間に理解と信頼感が深まることを願っております。

高校授業料無償化、朝鮮高校を放置して2年

2010年4月、日本教育史において画期的な措置である高校授業料無償化が施行されて2年経過した。

文科省は朝鮮高校授業料無償化について、その対象になることを想定して予算計上していたにもかかわらず、中井拉致担当大臣の動きや、2010年11月の大延坪島砲撃事件時の菅首相による指定手続き停止指示、「北朝鮮憎し」の「世論」等によって、放置されたまま現在に至ってしまった。昨年8月に菅首相が退任直前に朝鮮高校への適用審査凍結を解除してからも一向に状況は進展していない。野田首相も家族会、救う会の信頼が厚い松原拉致担当大臣を選任するなど厳しい状況が続いている。そればかりではなく、東京、埼玉、宮城等では朝鮮学校へのわずかな補助金さえ、支給凍結または廃止されてしまった。

膠着、悪化した状態を打開するべく、全国の諸団体が結集した「高校無償化」からの朝鮮学校排除に反対する連絡会や、朝鮮学校生徒や保護者、教員は、文科省、国会への要請行動、院内集会等をくりかえしてきた。

朝鮮学校は、1945年8月15日以後、各地に設立された国語※講習所以来の長い歴史を有する。日本国内の外国人学校の中で、イマージョン教育を中心軸に多くの教育実績をつみかさねてきた学校である。実際にこの間の「韓流」を下ささえした人材の多くは朝鮮学校出身者であることがその一端であるように、朝鮮学校卒業生は日本各界でひろく活躍している。また世代が交替した現在は、「祖国に帰国する」ことを前提とした教育ではなく、南北それぞれのために、そして統一のためにつくすとともに、日本社会の一員として役割をはたすことができる人材育成を教育の重要な目標としてきた。朝鮮語(=韓国語)を駆使できるかれらは、日本と南北朝鮮をつなぎ、南と北をつなぐことのできる貴重な人材であるといえる。さらにいうならば、東北アジアの平和と発展に寄与することのできる貴重な人材であるといえる。このような朝鮮学校をなぜ敵視するのか。

2月14日、参議院院内集会で、わが会が大変お世話になっている吉峯啓晴弁護士は「人権の観点から見た『高校無償化』問題」と題し、おおよそつぎのような講演をされた。

高校無償化法は憲法26条(教育を受ける権利)の具体化のために制定されました。この憲法26条はいわゆるプログラム規定とされており、具体的な法律が制定されることによりその憲法理念は実現されることとなります。したがって、教育を受ける権利を具体的なものとするためには、この無償化法適用は欠くことのできないものとなっています。

したがって、朝鮮学校への無償化法適用は「教育を受ける権利」の実現であるにもかかわらず、生徒・保護者とは何の関係もない北朝鮮の拉致問題を理由に無償化法の適用を先延ばしすることは許されることではありません。

(神奈川朝鮮学園を支援する会 『会報』37号より転載 2012.3.22)

何人(なんびと)も「平等に教育を受ける権利」があるという原点に立ち返り、高尚な理念下、実現した高校無償化に汚点をのこさないためにも、一刻もはやく朝鮮高校に授業料無償化措置を適用すべきである。拉致問題や北朝鮮に対する好き嫌いの問題とはまったく別問題である。放置された現状は、一日本人としてあまりにもはずかしい。

※「国語」とは母語である朝鮮語のこと。

日韓合同授業研究会第18回交流会要綱（案）

奈良・飛鳥大会

テーマ「真実の歴史を求めて～隠された歴史・造られた歴史」

期日 2012年8月3日（金）～6日（月）

会場 祝戸荘 住所 奈良県高市郡明日香村祝戸303

TEL 0744-54-3551 fax 0744-54-3552 E-mail : info@asuka-iwaidoso.com

日程

- 8月3日（金） 16:30 開会行事
18:30 夕食・歓迎レセプション
20:30 日韓別ミーティング
- 4日（土） フィールドワーク
7:00 朝食
8:30 フィールドワーク
石舞台古墳、飛鳥寺、飛鳥資料館、法隆寺、橿原神宮等
- 5日（日） 全体会（祝戸荘）
7:00 朝食
9:00 全体会①
12:00 昼食
13:00 全体会②
18:00 夕食
19:00 レセプション
- 6日（月） 全体会・反省会
7:00 朝食
9:00 全体会③
10:40 趙博さんライブ♪
12:00 閉会式
12:30 昼食後解散

講師・発表者

①講師 福西満さん 他交渉中

②発表者

(1) 「古代日本と朝鮮との関係をどうとらえるか」

～育鵬社版中学歴史教科書の古代日朝関係史像～

遠藤 正承（高校）

(2) 「古代史を教える」

アン ミョンソン（韓国・高校）

(3) 「アリラン」

柳 理順（朝鮮学校）

(4) 小学校における実践報告

松田 暢裕（小学校）

(5) 未定（韓国側発表者）

③特別講演（ライブ） 趙博（ミュージシャン）

参加費用

全日程参加の場合 35,000 円 (学生 30,000 円)

その他部分参加の方は、参加分の費用となります。

4日のフィールドワークはバスでの日程になりますので、定員をオーバーすると、受け付けられない場合があります。

5日の全体会参加のみの方は、昼食を各自ご用意下さい。

申し込み締め切り期限

2012年6月末日とします。申し込み用紙は次号の「ウリ」にてお送りします。

日韓合同授業研究会員（ウリ購読者）の方は、交流会までに2012年度までの年会費（3000円）をお納め下さい。（交流会当日も受け付けます。）

その他不明な点は日韓合同授業研究会事務局までお問い合わせ下さい。

学習会のお知らせ

6月3日（日）14:00 アジア文化会館（都営三田線千石駅5分）

広沢佑さん「多文化の子どもたちとの毎日」他

学習会の後、交流会の準備を行います。

短信

◎交流会で歌ってくださることになった趙博さん（パギヤン）のライブが大倉山であるということで、授業研の人たちと聞きに行きました。「在日関西人」と名乗るパギヤンの歌と演奏は、「芸」として素晴らしいものでした。代々木大会で病気を押して来てくださったマルセ太郎さんの芸を歌で受け継いでいるとのこと。パロディーを駆使しながら在日の歴史を歌いあげる「百年節」や、「祖国と女たち」、朝鮮訛で歌う「ヨイトマケの唄」など、聞きごたえのある歌と楽しいトークで時間があっという間に過ぎました。パギヤンが韓国の人たちにどんな歌を歌ってくれるのか楽しみです。

◎予算がだいぶ厳しくなってきました。より充実した活動を行うために、会費（年300円）の納入をお願いします。振込用紙を同封します。(F)

ウリ 80号 2012年4月

日韓合同授業研究会

〒102-0074 東京都千代田区九段南3-9-11

マールコート麹町303

吉峯総合法律事務所内

事務局連絡先

E-mail larrabee1991@yahoo.co.jp

会費納入先

郵便振替 00170-1-428530